

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第7回



中村 良夫

東京工業大学 名誉教授

土木界が誇る文化知識人であり、1990〜1992年の学会誌編集委員長も務められた景観論の中村良夫先生に、時代の変革期の思考をたどる3冊を伺いました。

高

度成長期の国土の風景の変貌に土木の分野から理論的

にせまった景観工学の第一人者である中村先生は、古今東西の文化を縦横無尽に引いた多数のご著書を執筆されている。その博学の中村先生が選んでくださったのは、時代の変革期を生き抜いた知識人の深い思索をつづった3冊である。

まずは『方丈記』。誰もが古典の授業で一度は触れる「ゆく川の流れ

は、」というリズムミカルな響き。しかしそれ以上に向き合う人は多くない。中村先生は、これは読むたびに

新しい古典中の古典で、浮世を離れた隠遁者のつづきなどではない。災害の状況などが詳細につづられ、貴族社会から武家社会へという時代の大転換期を徹底したリアリズムでとらえようとした鴨長明という人物への興味も尽きない、とおっしゃる。

『ヨーロッパとは何か』は、欧州



NAKAMURA Yoshio

1938年生まれ。東京工業大学名誉教授。著書に『風景学入門』、『湿地転生の記』、『都市をつくる風景』ほか多数。広島太田川や古河総合公園のデザインにも長年関わる

経済史の専門家増田四郎の日本の市民社会のあるべき姿に対する問題意識に根差した一冊である。ヨーロッパという概念

や地域、あるいはイギリス、フランスという近代国家のルーツを追い、都市や国という仕組みとそこに生きる市民との関係の成立に目を向けることで、今私たちが前提としがちな国や社会の形を今一度見つめなおすきっかけと補助線を与えてくれる。西欧をモデルとして近代化を進めた日本が学びきれなかったヨーロッパ的なものとはなにか、を考える本でもある。

最後の『風土の日本』は中村先生が永年懇意にされているフランスの地理学者ベルクによる日本論。その後長く滞在することとなった日本の都市と最初に出会った時の、めまいを覚えるような感動に突き動かされてつづられた日本の自然と人間の



方丈記 徒然草
(新日本古典文学大系)
岩波書店、1957年



ヨーロッパとは何か
増田四郎：
岩波新書、1967年



風土の日本
オギユスタン・ベルク：
筑摩書房、1988年